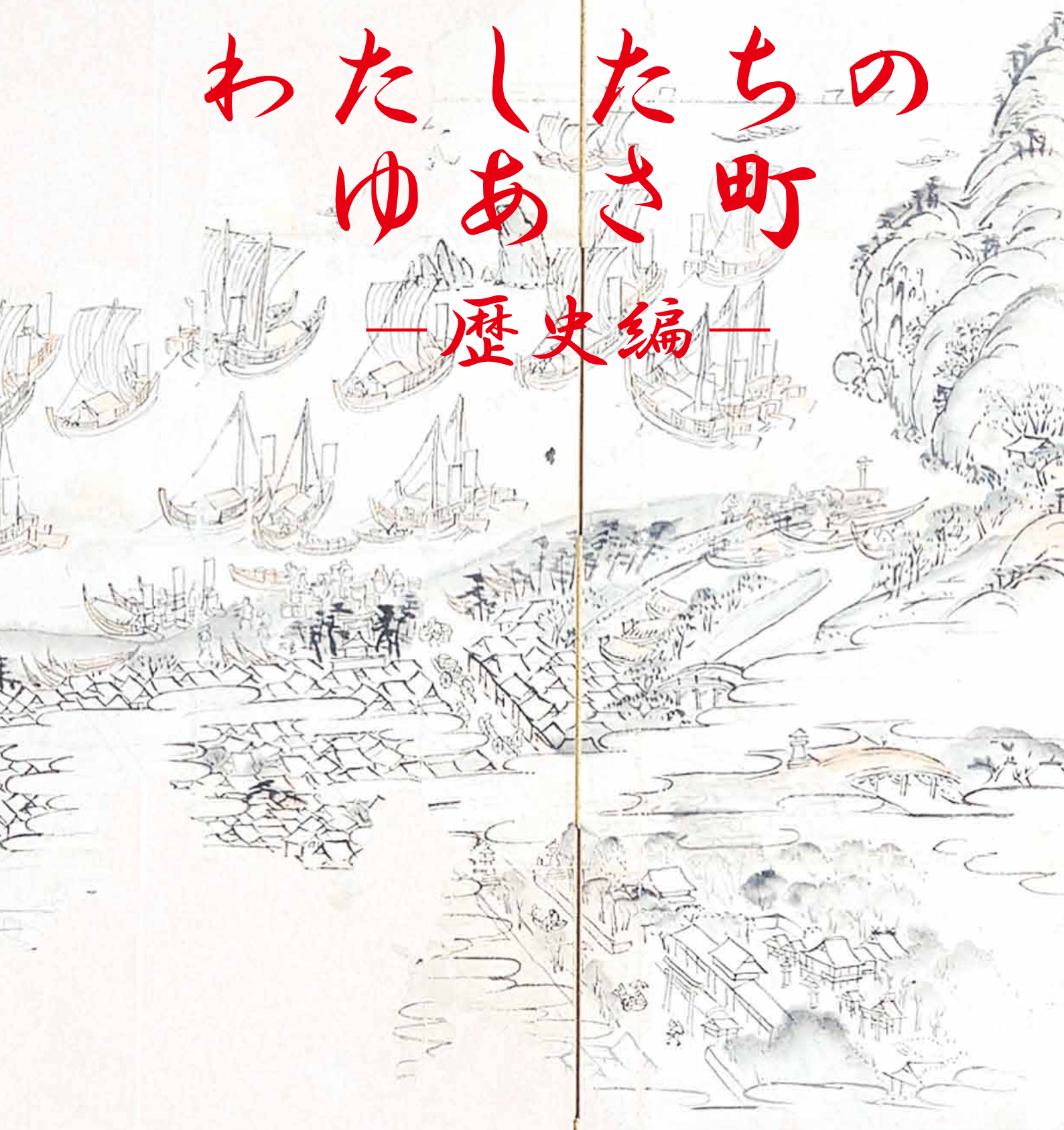


わたしたちの ゆあさ町

—歴史編—



湯 浅 町 教 育 委 員 会
湯 浅 町 副 読 本 作 成 委 員 会

わたしたちの
ゆあさ町
ー歴史編ー



ちょうしょう
町章

この本で勉強するみなさんへ

この本は、湯浅町内の小学校 6 年生のみなさんが、湯浅の^{れきし}歴史を学習する中で、これからの社会のことについて考える^{さんこう}参考になるように作りました。

私たちが住んでいる湯浅町は、和歌山県でもたいへん古くから^{さか}栄えた町で、『歴史と文化の町』といわれています。

歴史や文化を学ぶということは、自分たちの暮らす社会の将来を考えることでもあります。

ただ本を読むだけでなく、実際に調べる学習などにも取り組んで、^{きょうど}郷土のことをしっかり知る機会にしてください。

も く じ

地名の由来	1
1. 古墳時代 こふん	1
2. 飛鳥時代 あすか	1
(1)「万葉集」と栖原の浜 まんようしゅう すはら	1
(2)掘り出された古銭「和同開珎」 ほ こせん わどうかいちん	2
3. 平安・鎌倉・室町時代 へいあん かまくら むろまち	2
4. 江戸時代 えど	3
(1)慶長の検地 けいちょう けんち	3
(2)くらしと制度	4
(3)醤油と漁場の町 しょうゆ	4
(4)宿場町・商家町 しゆくばまち しょうか	5
(5)多かったお寺・寺子屋・私塾 てらこや しじゆく	5
(6)災害とのたたかい	6



5.	きん だい 近代	め い じ (明治・	たい しょう 大正・	しょう わ 昭和)	7
	(1)	明治			7
	(2)	大正・	昭和		7
	郷土のためにつくした人々				8
1.	ゆ あ さ 湯浅	む ね し げ 宗重			8
2.	み ょ う え 明恵	しょう に ん 上人			8
3.	す は ら 栖原	か く べ え 角兵衛			9
4.	す は ら や 須原屋	も へ え 茂兵衛			10
5.	き く ち 菊池	かい そう 海荘			10
6.	どう の ま え 常野前	た ね ま つ 種松			11

湯浅町の歴史年表

●昭和初期の湯浅の町並み



地名の由来

原始社会の頃の湯浅の地形は、今とはずいぶん違い、現在の海岸線よりもずっと山の方へ海がはいり込んでいました。現在の土地の高さでいうと、^{かいぼつ}海拔およそ6・7メートルのところから陸地であったと考えられています。つまり、湯浅町の中川原、島之内、中ノ島など多くのところは海でした。湯浅の地名も「湯（水）が浅い」からつけられたといわれています。

広川は、今よりもずっと南を流れていました。一方、山田川はいくつにも分かれ、海に流れ込んでいました。山田山の土が流れ積もって、水が豊かな地下水となったと考えられています。

岩のとび出した所を「^{さき}崎」といいますが、古い地名には、「^{いわさき}岩崎」（現在の「^{おおみやどお}大宮通り」）、「^{くもさき}雲崎」（現在の「^{べっしょ}別所」）などの名前が残っています。

1. ^{こふん}古墳時代

^{べっしょ}別所地区（現在は住宅地）に、高さ約20メートルほどの小山の上に、直径30メートルほどの「^{えんふん}円墳」がありました。これは5世紀の終わり頃、この^{あた}辺りの^{ごうぞく}豪族の古墳であると考えられています。周囲には3つの池や湿地があり、「はにわ」が3段に立てられて、頂上には、箱式の「^{せつかん}石棺」が二組残されていました。また、「^{まがたま}勾玉」や「^{きんかん}金環」「^{ちよくとう}直刀」なども埋められていました。



現在、中央公民館には、家や^{たち}太刀、^{たて}盾、^{えんとう}円筒、人物の形をした「はにわ」の破片と、^{はへん}石棺が保存されています。

2. ^{あすか}飛鳥時代

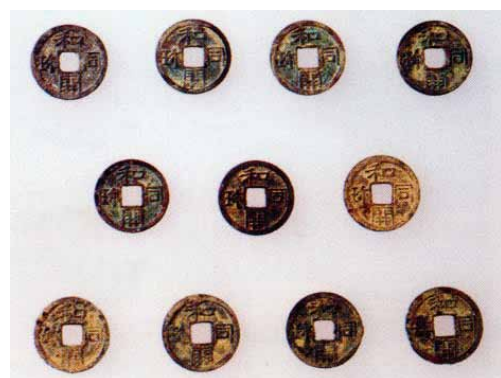
(1) ^{まんようしゅう}「万葉集」と栖原の浜

790年頃、全国から4500首もの歌を集めた「万葉集」が作られました。その歌集の中に、^{いとがやま}糸我山の桜や栖原の^{しらかみ}白神の^{いそ}磯を歌ったものがのせられています。



(2) 堀り出された古銭「和同開珎」

708年(和銅元年)につくられた「和同開珎」が、吉川地区や青木地区の山畑から発見されています。旅の無事をいのったり、なくなった人と共に埋めたりしたのでしょう。



3. 平安・鎌倉・室町時代

平安時代の終わり頃から、上皇、貴族たちの「熊野詣で」がさかんになり、湯浅はその宿場町として栄え、人口も増えました。

湯浅に本拠をおく「湯浅氏」は、武力を強めながら、船を使った物資の輸送でも力をつけ、しだいに紀北地方最大の武士団となりました。

お城は、初め湯浅の北にある広保山に、その後、東の青木山に移し、およそ300年間にわたり、この辺りの領主(のちに地頭)として治めました。

また、湯浅の顕国神社や青木の若宮神社、別所の勝楽寺、山田の観音堂などを造りました。

やがて平氏が源氏にほろぼされると、湯浅氏は源氏の一員として活躍し、勢力を広げました。一族から、京都高山寺や栖原の施無畏寺を造った「明恵上人」が出ました。

鎌倉時代、地頭となった湯浅氏はさらに勢力をのぼそうと高野山などと領地をめぐる争うこともありました。

湯浅氏は、室町幕府から紀伊の国の守護に任命された「畠山氏」と争いましたが、ついには敗れて一族は全国各地にのがれました。

1400年に、畠山基国は、広に屋形、名島に高城（広城）を築き、およそ130年間この地を治めました。しかし、その後、紀南や日高の豪族の反こうが強まり、1522年には、日高の湯川氏に攻撃されて落城、紀北にのがれました。

畠山氏が去った後、その家臣であった白檜氏が満願寺山に城とやしきを造り、湯浅の領主になりました。

白檜氏は1522年（大永2年）から1615年（元和元年）までの94年間、この地を治めていましたが、豊臣側について徳川側と戦って、敗れました。



▲勝楽寺仏像



▲施無畏寺



▲湯浅城跡

4. 江戸時代

（1）慶長の検地

徳川家康は、戦にこうせきのあった家臣の浅野幸長を紀州の領主にしました。幸長は、田畑を測量し、持ち主と年貢（税）をはっきりさせました（慶長



けんち
検地)。さらに、和歌山城を築き、
はん き そ
紀州藩の基礎をつくりました。紀
州藩は、水戸、尾張とともに徳川
御三家となり、徳川頼宣よりのぶが初代藩
主につきました。

(2) くらしと制度

江戸幕府や各地の藩はんは、町や村々に郡奉行こおりがぎょう、大庄屋おおしょうや、庄屋、肝煎りきもい、村役人、五人組などをつくりました。

現在の湯浅町と広川町は、「湯浅組」と呼ばれていました。

さらに、湯浅村は、漁業を中心とする「浜方」、農業や商業を中心とする「里方さとがた」に分けられていました。まわりには、田村、栖原村、吉川村、別所村、青木村、山田村があり、このうち山田村だけ田辺たなべの安藤氏あんどうの領地になっていました。

(3) 醤油と漁業の町

江戸時代になって、商業、農業、漁業がますます栄えるようになりました。

商業としては、それまでそれぞれの家で作られていた「醤油」や「味噌」が、各地へ売り出されるようになりました。特に湯浅では仕込み蔵や大小の樽たるを使ってたくさん作られました。

農業でも、新しく田畑を開き、「新田しんでん」や「新畑しんばた」が増え、水を使うため、「ため池」や「みぞ」が造られました。広川が現在の位置になったのもこの頃で、広川の流れを南から北に移し、湯浅への水路を造ったことによります。また、山の斜面に段畑しゃめん だんはたを開き、みかんを作りました。収かくしたみかんは「有田みかん」として遠く江戸まで船で運ばれ、売られるようになりました。

湯浅の漁業は当時紀州一と言われていました。それを支えたのは質の高い漁網ぎょうもうや進んだ漁法などです。

イワシを大量にとることによって、綿わたや菜種なたね、みかん作りの肥料ほしに使う干鰯かも生産され、上方かみがた（大阪）へも売り出すことができました。

また、漁師たちは、房総半島りょうしや五島列島ぼうそうにまで漁場ぎょじょうを広げ、なかにはその

土地に移り住んで漁業を営む人もいました。

豊漁^{ほうりょう}と安全をいのって寄付^{きふ}された手水鉢^{ちょうずはち}が今も顕国神社^{けんこく}の境内^{けいだい}に残っています。



(4) 宿場町・商家町

▲手水鉢^{ちょうずはち}

糸我峠^{いとがとうげ}から方寸峠^{ほうずと}を越えて、湯浅^{ゆあし}のなかを熊野参詣道^{くまのさんけいみち}がまっすぐに南へ通っています。「道町」という名前は、参詣道の「道」のことです。

また、紀南への旅の宿駅^{しゆくえき}として、「伝馬所^{てんまじょ}」や「一里松^{いちりまつ}」、「旅籠^{はたご}」（宿屋）などもつくられて、「湯浅千軒^{せんけん}、広千軒」といわれるように、和歌山についてにぎわうようになりました。

町中^{まちなか}で井戸をほると、おいしい山田川の伏流水^{ふくりゅうすい}がたくさんくみ出すことができました。

入り江が広く、船の出入りがしやすかったため、港からは醤油^{しょうゆ}の積み出しや、原料の大豆や麦、塩などいろいろな物資が商店に運びこまれ、有田^{げんかん}の玄関^{ぐち}口として栄えました。

湯浅の町は、醤油^{みそ}や味噌屋、肥料屋^{かなものや}、金物屋、衣料屋、菓子屋^{かし}、八百屋^{やおや}、薪炭屋^{しんたん}、薬屋^{せともの}、瀬戸物屋、魚屋^{さかや}、酒屋など、いろいろな商売をする店が多く建ちならび、大変にぎやかな町になりました。

今でも江戸時代に建てられた「町家^{まちや}」が残り、平成18年には県下初の国の「重要伝統的建築群保存地区」に指定され、観光に訪れる人も増えました。

(5) 多かったお寺・寺子屋^{てらこや}・私塾^{しじゅく}

各村々には、お寺や神社、地藏堂^{じざうどう}が建てられ、お参りする人やお祭りなども大変多くなり、にぎわいました。

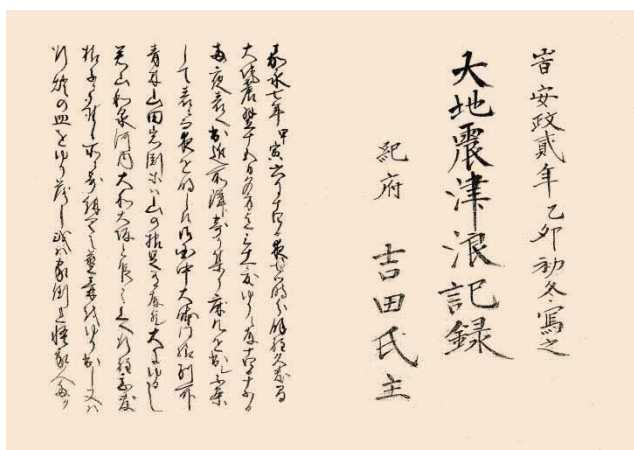
◎各村々のお寺の数

湯浅村：8ヶ寺	別所村：1ヶ寺	青木村：1ヶ寺
山田村：3ヶ寺	栖原村：5ヶ寺	田村：3ヶ寺
吉川村：2ヶ寺		合 計：23ヶ寺

こうしたお寺のなかには、仏事（仏教の儀式）のほかに、子どもの読み書きを教える「寺子屋」を開いたところもありました。寺子屋は、現在の小学校のようなものです。また、個人によって開かれた「私塾」では、学問や商売に必要な知識などを教えるようになりました。書道や絵画を習う人、俳句や漢詩をつくって楽しむ人も増えて、古い家には、今も大切に残されています。

（６）災害とのたたかい

江戸時代の２５０年間には、地震、津波、台風、火事、飢饉、流行病などの災害も多く、人々は協力して、それらを乗り越えました。深専寺の前にある「大地震津波心得の記念碑」や最勝寺の「安政津波記」をはじめ、古い家には安政の地震・津波の様子を細かく書かれた本が保存され、防災の心得や避難の仕方、それに村人が助け合って村を復興した様子が記され、大切に残されています。



▲大地震津波記録



▲ おおじしんつなみこころえひ
大地震津波心得碑

◎江戸時代の主な大きな災害

1652～54	(承応年間)	湯浅大火	
1663	(寛文3年)	湯浅大火	
1707	(宝永4年)	地震・津波	流失628戸 死者54名
1776	(安永5年)	はしか大流行	
1824	(文政7年)	はしか大流行	
1833～7	(天保4～7年)	大飢饉	
1854	(安政元年)	地震・津波	流失440戸 死者28名

5. 近代（明治・大正・昭和）

（1）明治

1868年、長く続いた江戸幕府の力がおとろえ、新しく天皇を中心として明治新政府がつくられました。

「紀州藩」が「和歌山県」に変わり、県知事や県議会、市町村長や市長村議会などは国民の選挙によって選ばれることになりました。

湯浅町は、有田郡内の中心地として、ここに有田郡役所や有田郡会議事堂、有田民政局、湯浅税務署などの役所をはじめ、定期船の港、小学校、病院などが、次々につくられました。

（2）大正・昭和

1915年（大正4年）5月、湯浅海岸駅と金屋口駅を走る有田鉄道が開通し、1919年（大正8年）5月、今の県立耐久高等学校の前身である有田高等女学校が開校しました。

1927年（昭和2年）8月、国鉄紀勢線が和歌山から湯浅駅まで完成しました。

また、1924年4月、湯浅町立図書館が開館、その後、保健所、病院、築港、河川の堤防など建設が進められ、町も大きく発展していきました。



◀ 郡役所



◀ 道路の拡幅工事（明治）



◀ 船の乗降場・積荷（昭和）

郷土のためにつくした人々

1. 湯浅 宗重……鎌倉時代初期に活躍した武士

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて湯浅を本拠地に活やくした武士です。宗重を中心とした湯浅党は戦を記した書物によく登場し、平氏の時代には平清盛から、その後鎌倉時代には頼朝からの信頼が厚かったといわれます。

また、一方で、神仏を尊いものとして信仰し、顕国神社（湯浅）・国津神社（田）・平野観音堂（山田）・若宮神社（青木）・勝楽寺（別所）などを守ったり修理したりして、戦でなくなった人々をまつりました。そして、湯浅の町を大きくするために力をつくしました。



▲ 顕国神社



▲ 平野観音堂

2. 明恵上人……鎌倉前期の僧で、母親は湯浅宗重のむすめ

承安3年（1173年）、今からおよそ830年前、石垣庄（金屋町）吉原に生まれた明恵上人は8歳の時に両親をなくし、9歳のとき、京都の神護寺に入ります。16歳になって出家（お坊さんになる）し、成弁（のちに高弁）と名のりました。

23歳で故郷の湯浅に戻り、栖原の白上などで長く厳しい修行をつみました。その後、京都の高山寺を再興しました。

上人は、京都の公卿や鎌倉幕府の執権という地位についた北条泰時など、位の高い人々をはじめ、一般の庶民にいたるまで、多くの人々から、その人柄や教えが慕われました。仏師として名高い運慶、快慶らも上人を慕いました。

また、北条泰時^{ほうじょうやすとき}が定めた幕府の基本法典^{ほうてん}である「御成敗式目^{ごせいばいしきもく}」にも、上人^いの教えが活かされているといわれています。

施無畏寺^{せむいじ}は上人が59歳でなくなる前の年に建てられました。



◀ 白山にある明恵上人の卒塔婆
(国指定史跡)



◀ 明恵上人像（施無畏寺蔵）
(町指定有形文化財)

3. 栖原^{すはら} 角兵衛^{かくべえ}……栖原家^{とうしゅ}当主の代々の名前

江戸時代初期に吉川^{よしかわ}で生まれ、栖原に住んでいた北村茂俊^{きたむらしげとし}は房総^{ぼうそう}(千葉県)の漁場^{ぎょじょう}を開拓^{かいたく}し、代々栖原角兵衛を名のりました。

5代目角兵衛は蝦夷^{えぞ}(北海道)の漁場を開拓し、6代目は樺太^{からふと}と北海道(宗谷^{そうや})の間に定期航路を開いたり、樺太・千島^{ちしま}などに次々と漁場を開いたりしました。7代目は、函館^{はこだて}の近くの上山村^{うえやまむら}の開墾^{かいこん}を行い、栖原村をつくりました。そして、日本の北方の発展につくしました。



▲ 栖原角兵衛のやしき（国登録有形文化財）



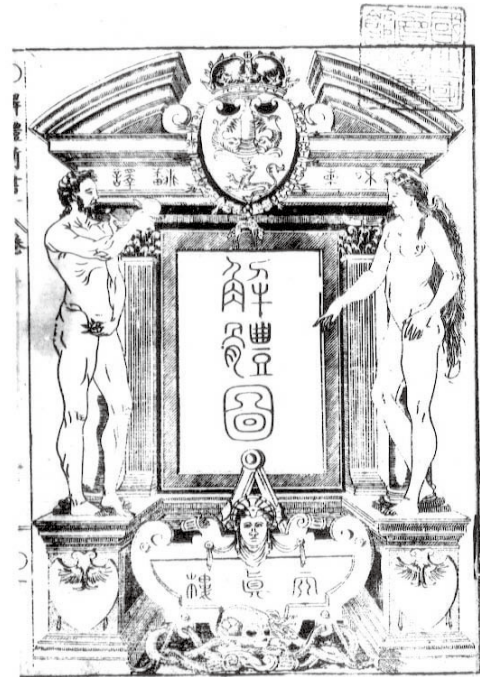
▲ 栖原角兵衛の碑

4. 須原屋 茂兵衛……須原屋の本店当主

江戸時代中期、4代目須原屋茂兵衛は、杉田玄白の『解体新書』を出版した「江戸の本屋」須原屋の本店当主です。

栖原村の須原家は、代々江戸で薬問屋と出版業を営み、山の手の武士や教養人に人気がありました。

当時、『解体新書』は罪に問われる危険性のあるものだったにもかかわらず、日本の将来のために出版を決断した功績は高く評価されています。



◀「解体新書」の中のページ
(国立国会図書館の資料より)

5. 菊池 海莊……古碧吟社を創設した詩人

江戸時代後期、栖原に生まれた菊池海莊は、家業の砂とうや薬の問屋を江戸で開きました。また、詩（漢詩）を好み、全国でも有名な詩人であり、学者や詩人たちをよんで、文化の発展につくしました。さらに、渡辺崋山、佐久間象山、大塩平八郎らとも親交を結び、国内、世界の情勢に通じていました。

天保の飢饉のときには私財を投げうって、栖原坂や田村坂の切り通しの工事などの土木工事をおこして、生活に困った人たちを助けました。

また、剣道の道場を開き、学問をすすめる若者の育成にもつとめました。こうして郷土の発展のためにつくしました。

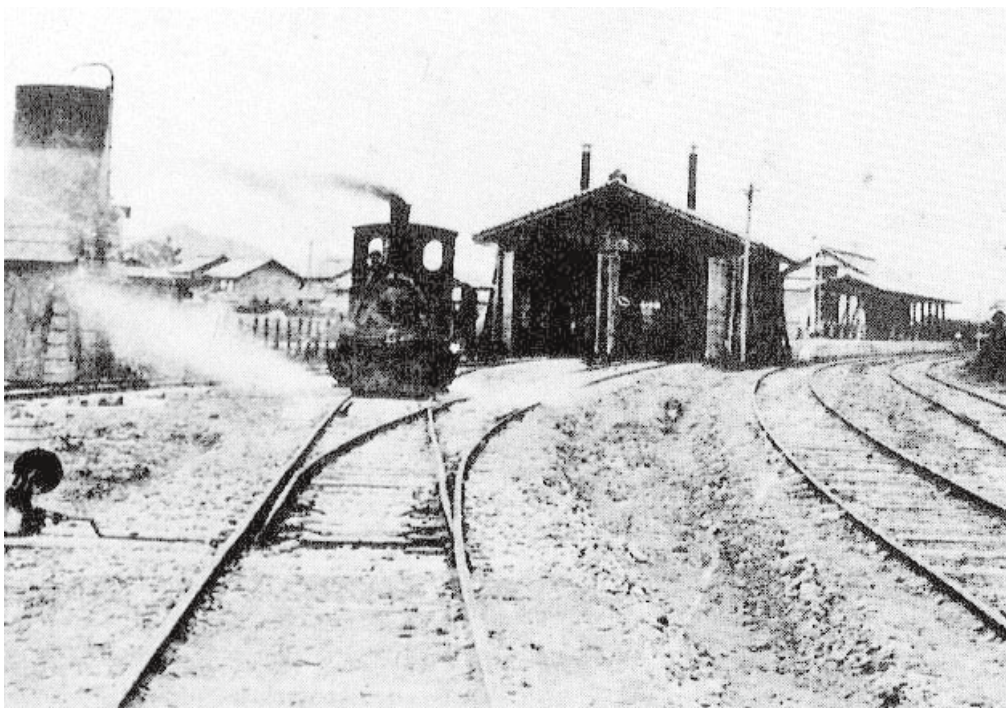


◀菊池海莊のやしき跡

6. ^{どうのまえ}常野前 ^{たねまつ}種松……明治・大正・昭和と郷土につくした人

明治時代、山田で生まれ、小学校の先生を20年間つとめたあと湯浅町長になり、県議会議員にもなりました。

大正2年（1913年）に、湯浅と金屋をむすぶ「有田鉄道」をつくったり、山田小学校（今の山田公民館）の近くに「^{しゅんじゅうかく}春秋閣」という図書館（今の町立図書館のはじまり）をつくったりして、^{きょうど}郷土の発展につくしました。



◀ 有田鉄道



◀ 山田公民館（現在）

湯浅の歴史

古墳時代	飛鳥時代	奈良時代	平安時代	鎌倉時代	南北朝時代
------	------	------	------	------	-------

・湯浅党は三〇〇年にわたり勢力を保つてきたが、南朝とともに滅びる。

・湯浅党は、南朝の味方をし、遠く九州方面まで活躍の場をひろげた。

・湯浅は湯浅党の中心地として、また交通の要として栄える。

・湯浅党はより強い武士集団となり、京都の警備などにもあたった。

一一九二年：鎌倉幕府成立

・湯浅氏は、平氏の在地家人として重んじられる。

＊熊野三山
熊野にある聖地
本宮・新宮・那智

・仏教がひろがるとともに熊野三山が信仰を集め、湯浅が熊野街道の重要な宿駅となる。

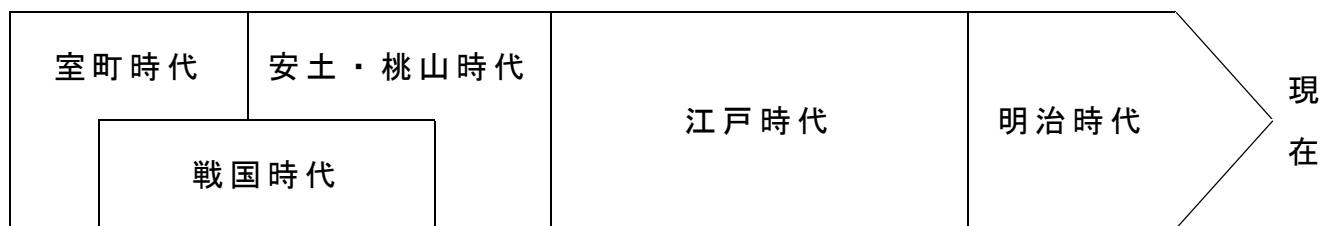
・豪族である湯浅氏の活躍とともに「湯浅」という地名が歴史上の文献に登場する。

七九四年：平安京に都がうつる

七一〇年：平城京に都がうつる

・このころの人々は、有田市糸我より鹿打坂を越えて栖原にでる道を利用していた。

・五世紀後半に天神山古墳がつくられたといわれている。



・昭和三十一年に湯浅町と田栖川村が合併して、現在の湯浅町となる。

・明治二十九年に湯浅村が湯浅町となる。

・青木村と山田村が合併して湯浅村に、田村と栖原村と吉川村が合併して田栖川村になる。

一八六八年：江戸開城

・幕末には、湯浅は城下町について人口の多い商業都市となる。

・菊池海莊らが古碧吟舎を、石田冷雲が就正塾を開く。

・商業関係者が中心となって心学を学ぶ「有信舎」が創設される。

・湯浅しように油が紀州藩の保護をうけて重要な産業となる。

・交通上重要な位置にあった湯浅は、商工業のさかんな街として発展する。

一六〇三年：江戸幕府成立

・熊野街道の宿駅として、また紀伊水道の港町として地理的に恵まれ、街が整う。

一三三八年：室町幕府成立

*心学

人間の生き方、道徳などを説いた学問

わたしたちのゆあさ町

一 歴 史 編 一

作成委員

戎 和男（湯浅町文化財保護審議委員長）
齋藤春太郎
大西 義弘（湯浅町教育委員会職員）
中井 弘秋（湯浅中央公民館長）
川口 厚之（湯浅町教育委員会指導主事）
長田 和浩（湯浅町教育委員会指導主事）

協力者

前田 和昭（湯浅町産業環境課伝建推進室長）

湯浅図屏風

南紀男山焼絵付師・光川亭仙馬（土屋政吉 1816～93）の旧宅から見つかった絵図で、明治前期の作と考えられます。

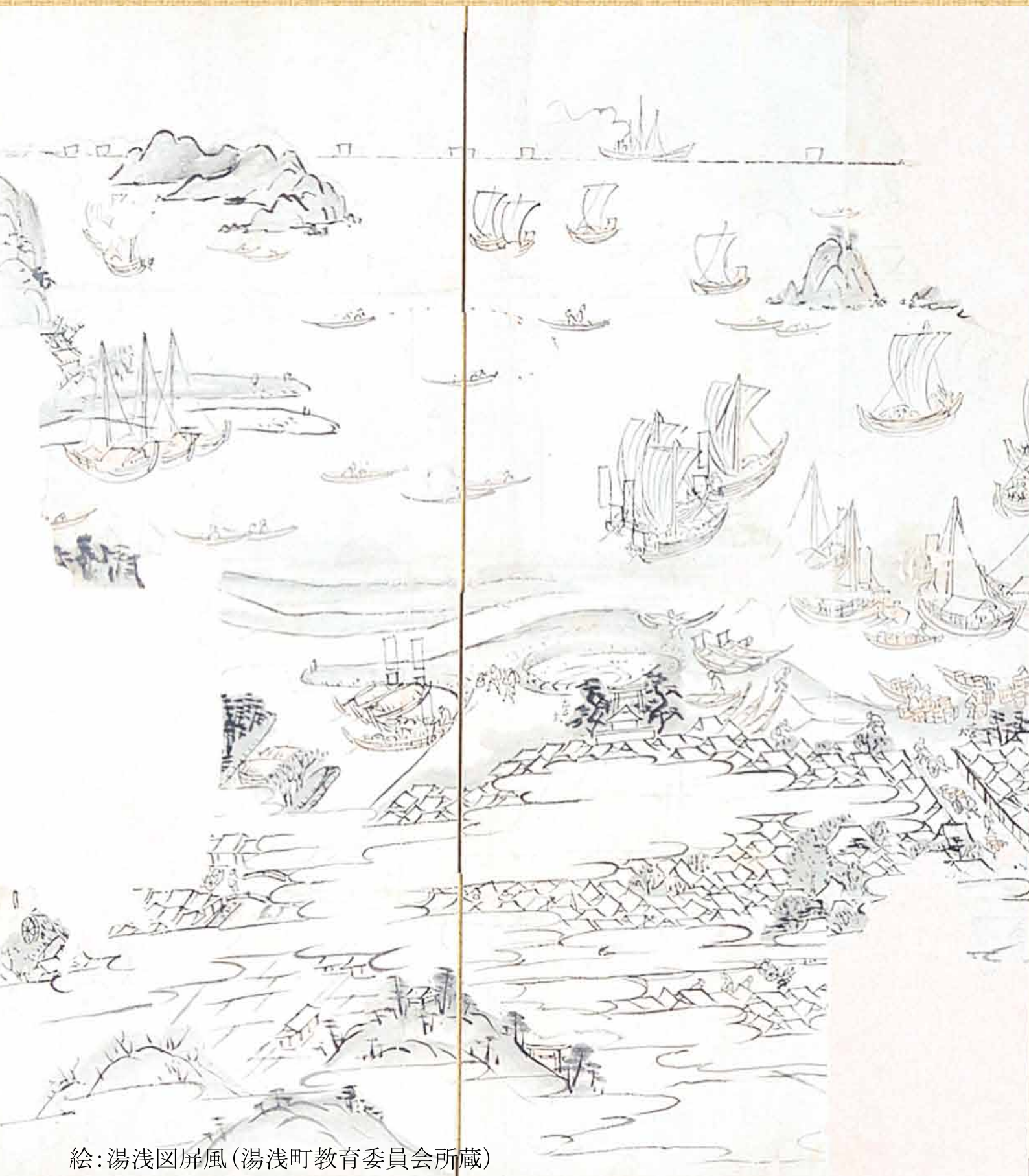
湯浅の町並みと湯浅湾を東方から俯瞰した構図で、通りには荷物を載せた大八車が行きかい、港には多くの船が寄港する活気あふれる町の様子が描かれています。

初版	平成 2 0 年 1 0 月
改訂	平成 2 1 年 3 月
改訂	平成 2 5 年 3 月

編集 湯浅町副読本作成委員会

発行 湯浅町教育委員会

印刷 中紀印刷



絵：湯浅図屏風（湯浅町教育委員会所蔵）

湯 浅 町 立

小 学 校

氏 名